

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20500231

研究課題名(和文)

空間情報からみた農村開拓過程と移住ネットワークタイ国東北部を対象として

研究課題名(英文)

Geospatial studies on establishing rural villages and migration networks in Northeast Thailand

研究代表者

永田 好克(NAGATA YOSHIKATSU)

大阪市立大学・大学院創造都市研究科・准教授

研究者番号：70208023

研究成果の概要(和文)：約半世紀前の地形図によれば、ソクラム河流域は河川沿いを除いて農村集落の分布が疎である地域であったが、現在までに急速に村落が増加した。過去半世紀内に開村した村落4カ村で移住に関する現地調査を行い、農村開拓過程を空間情報の視点から復原することを試みた。一定の分析を終えた調査結果から得た知見は次の点である。村落の発展を支えるのは、開村初期は地縁者集団であり、その後の発展期には共同体で育まれた血縁者集団が共同体を着実に発展させる。成熟期に入ると共同体外部からの移住者は急減する。

研究成果の概要(英文)：According to topographic maps of the 1950s, villages were sparsely distributed in the upper-middle watershed of the Songkhram River, however, many villages have been established after 1950s. In this study, household-level surveys were conducted in four target villages among such new villages to obtain information on migration history. Geographical analysis of three important places in their life, i.e., birth, marriage, and current places, suggests four stages in the growth of such new villages. While each of the four stages was of different duration, their pattern was almost similar among the surveyed villages regardless of their location and year of establishment.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：情報学・図書館情報学・人文社会情報学

キーワード：地理情報、タイ国東北部、農村開拓、空間分析

1. 研究開始当初の背景

本研究課題で対象とする地域は、タイ国東北部の中でも首都バンコクからは最遠地に位置するノンカイ県東部、ウドンタニ県東部、サコンナコン県北部および西部である。この地域はなだらかな丘陵部も多いことから、近代まではメコン河や支流のソクラム河沿いを除いて集落の分布が疎であったことが1950年代の地形図から判読できる。ところが現在は、かつての少数の集落が大きく都市

に発展し、あるいは集落さえ見当たらなかった土地に都市が出現し、これら都市を結ぶ道路沿いを中心に多くの農村が存在する。

タイ国の農村地域では古くから人口扶養のための開拓移住が繰り返されてきた。この開拓移住は開拓余地があつてこそ可能なものであり、余地がほとんどなく現在では開拓による農地拡大は不可能に近い。このような背景からみて、過去約半世紀の間に急速に集落が増えたこの地域は、開拓移住によって人

口吸収を支えた最後の地域のひとつと見ることが出来る。

研究開始までに行った予備調査によれば、開拓民の出身地は近隣部にとどまらず、遠く数百 km 離れた土地からも少なくない。なぜそのような遠隔地から移住したのか、どのような情報を頼りに移住したのかを明らかにすることは、タイ国内にとどまらず、メコン河をはさんだ隣国ラオスがタイよりも人口密度が大幅に低く今なお開拓余地があることから、今後のラオス国内における農村開発動態との比較研究にもつながる。過去の実態を解き明かすだけでなく、近い未来に近隣地域で起こりうる変容の一端を説明する知見となりうる。

2. 研究の目的

空間情報システムは近年さまざまな研究分野での活用が試みられており、人文社会の分野においても例外ではない。石川らの人文科学研究に関する地理情報の共有と分析の支援を目的とした空間情報ツールの開発や関野らの地理的空間よりもむしろ時間的空間を重視したツールの開発はその例でありツールも多様化しつつある。

空間情報システムの人文社会科学での活用における第一のステップは資料やデータを空間データベースとして構築することであり、第二のステップは構築したデータをもとに空間的な分析を重ねることである。さらにその先の学問的議論にまで結びつけ人文社会科学分野を専門とする研究者が満足する結果を得るところまでの道のりは、まだまだ試行錯誤の段階にある。

本研究では、研究代表者のこれまでの活動成果による基礎資料を足がかりとし、上記の第一のステップとしてさらに現地調査により得るデータを加え、具体的な地域社会変容としての過去約半世紀間の農村開拓の実態を分析することによって第二のステップに進む。具体的な事例における取り組みとして、空間情報システムの人文社会科学への活用範囲の拡大に寄与することを目指す。

本研究課題の特色は、空間情報システムの活用という視点だけにとどまらない。本研究課題における対象地域での農村開拓過程の一端を解明するこの試みは、例えば林が取り組むタイ国東北部の僧侶の修行ネットワークの解明に寄与する可能性を持つ。この地域の僧侶は衣食住においては農民の支えのもとにあり、また僧侶は農民の知識の源となっているからである。

より具体的には、タイ国東北部のソクラム河流域に多数分布する、開村以降半世紀前後の比較的新しい農村の開拓過程を、移住ネットワークを空間情報として分析することから復原することを目指す。農民がなぜ、い

つ、どこから移住したのかについてのデータを得、一見無秩序に見えるかもしれない移住に関するデータを空間的に分析することによって、移住のネットワークについて、あるいは農民の移住戦略について、議論に耐えうる結果を提示することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 当初予定した研究方法

- ① 1950年代以降の新規開村の空間的定量分析のために、村落分布のデータを作成する。
- ② 現地調査の対象候補村落を30村選定する。
- ③ 選定した候補村落を訪問し、村長や長老などへのインタビューによって現地調査を行う対象村落を15村に絞る。
- ④ 15村の現地調査を2年にわけて行う。調査票によるアンケート調査を全世帯(合計約1500世帯と予想)に対して行い、さらに対面による詳細な調査のうち1割を対象に行う。
- ⑤ アンケート調査結果および対面調査結果を空間情報システムに入力する。
- ⑥ 調査結果データの空間的分析を中心として農村開拓と移住ネットワークに関する社会学的解釈を行う。

(2) 実際に進めてきた研究方法

- ① 1950年代と1980年代の地形図を対比しながら、このふたつの版の地形図から判読できる新規開村とみられる村落分布データを作成した上で、現地調査の対象候補村落を約30村選定した。
- ② 研究期間初年度である2008年度当初に、対象候補村落のうち15村について現地調査を行い、村長や長老などへのインタビュー結果を検討して、最初の詳細な調査対象村をウドンタニ県バンドゥン郡N村とした。また、この事前調査の状況から、アンケート調査で正確なデータを得ることは困難であり、対面調査によることが望ましいと判断した。
- ③ 2008年度にN村を再訪し、現住する全世帯を対象として、開拓移住に関する対面調査を行った。
- ④ N村の調査後、N村とは周辺環境がやや異なる村落を次回調査の対象とするべく、4村で予備調査を行い、ノンカイ県ファオライ郡S村を2009年度調査の対象として選定した。
- ④ 2009年度に、S村での全世帯対象の対面調査を行い、また、同年度内に、別途サコンナコン県ワノンニワート郡NC村においても、同様に全世帯対象の対面調査を行った。
- ⑤ 2010年度は、ソクラム河上流部に位置するサコンナコン県ソングオ郡K村において、全世帯対象の対面調査を行った。

以上により、研究期間内において、ソクラム河上流域から中流域にかけての4カ村で、現住の全世帯を対象とした対面調査により、開拓移住に関するデータを収集した。

- ⑥ 収集したデータは、順次空間情報として

の属性を付与し、あわせて親族関係をもとに整理した上で、出生、婚姻、移住というライフサイクル上の重要な節目を中心に地理空間上の定量的な分析を進めた。

4. 研究成果

(1) 地形図から判読した村落増加

タイ国地図局発行の5万分の1地形図のうち1956年版と1986年版に記載されている村落名称を用いて、村落増加の実態を判読した(表1)。判読したのは、ソクラム河上中流域周辺の地形図5葉分である。地形図1葉は、経度15分緯度10分の範囲で概ね490km²の広さである。1986年当時の別の資料によれば、東北タイ平均で100km²あたり14村存在したことから、(d)の範囲では平均をやや上回る程度の村落密度であるが、30年間の変化は微増である。一方で、中流域である(a)(b)では、30年間で村落数が4倍前後にも増加した。増加した村落の3分の2は、1956年当時から存在していた既存村落から2km以上離れた立地であり、これらの村落は、既存村落の拡大ではなく新規に開拓された可能性が高いと判断できる。

このような新規開村の可能性が高い村落を対象に、現地調査候補として事前調査を行ったところ、長老たちの出生地が遠方の広範囲に及ぶことが通例であることが判明した。

表1 ソクラム河上中流域の村落数変化

		1956年版	1986年版	※
中流	(a)	2.3	10.0	4.7
	(b)	3.9	13.5	6.1
	(c)	7.4	11.8	2.0
	(d)	15.9	16.5	0.0
上流	(e)	5.3	8.8	2.4

(100km²あたりの村落数)

※1956年版既存村落から2km以上離れた立地の村落数

(2) ウドンタニ県N村

ウドンタニ県N村は、1956年版地形図上で最も近い村落からは3km離れた立地であり、標高185m前後に位置する。周囲の既存村落が標高160mから170mであることから、N村は丘陵部の森林に開かれた村である。

村長の公式データでは2007年現在173世帯850人が住むことになっているが、現住するのは145世帯であり、実態と公式データは乖離する。乖離の要因は、他村への転出、長期の出稼ぎによる事実上の離村などである。

聞き取り調査を総合すれば、この地への最初の開拓移住は1954年頃である。1963年には行政村になり初代村長を選出した。1970年代前半の苦難の時期を乗り越え、2007年には村の仏教寺院が、正式に寺としての認証を受けたことは、N村が一通りの発展を遂げた証

でもある。

N村で得た調査データのうち、出生地および婚姻地までの距離、および現住のN村への移住時と婚姻時の年齢を分析に用いた。その結果、村を構成する世代の特徴と村の発展段階および移住の方向が明らかになった。

調査時点で50歳以上であった熟年老年世代には、約260km遠方のスリン県出身者が多数存在するほか、他にも3箇所の主な出身地が存在する。これらの出身地は、いずれも東北タイの平均人口密度以上の地域である。N村の第一世代とも言える熟年老年世代は、遠方の人口密度の高かった地域から、人口の希薄なこの地へ移住してきた。この世代の出身地とN村の位置関係は、福井らが報告したチー河流域の村にみられる大河川の流れをさかのぼるものと異なり、ソクラム河上流側からの移入が少なくない。とはいえ、従来からの報告と相反するものではなく、チー河上流からさらにソクラム河上流へ達した後に下流方向へ開拓適地を求めて移動したものと考えられる。

一方で、第二世代とも言える調査時点で50歳未満の青壮年世代では、約4割がN村または近隣村の出身者である。村周辺での地縁が血縁につながり、共同体としての結びつきを強めている世代でもある。実際に、現在さまざまな面で村の運営を担っているのは彼らである。

N村に現住する世帯のデータにより、新世帯数の累積を分析すると、N村の発展段階を4期に分けることができる。開村期、発展期前期、発展期後期、成熟期である。開村期は、移入が多かったであろうことから、現在まで残る世帯は多くはない。発展期前期は、外部からの移入者で世帯数が着実に増加した時期である。発展期後期には、外部からの移入者よりも、村内での独立によって、新しい世帯が着実に増加した時期である。1998年以降、成熟期にはいり、世帯数の増加は頭打ちになった。屋敷地や農地に余裕がなくなったためである。

(3) ノンカイ県S村

ノンカイ県S村は、1956年版地形図上で最も近い村落からは2.5km離れた立地であり、標高175m前後に位置する。周囲の既存村落は標高150mから160mであることから、S村も相対的に丘陵部に開かれた村である。

村長の公式データでは2008年現在88世帯364人が住むとするが、現住するのは70世帯である。

最初の開拓移住は1974年であり、隣のNH村に居住していた農民が農地近くに居を移したのが始まりである。とはいえ、この初期の農民も遠方出身者であり、移住の過程で一時的にNH村に居住していた。

S 村についても N 村同様の分析を行った。熟年老年世代で出身者が多い村は見当たらないものの、決して近くではないコンケン・カラシン両県の出身者が半数近くを占め、地元ノンカイ県出身者はごく少数である。

青壮年世代においては、S 村あるいは近隣村出身者の割合が N 村同様に約 4 割であることは興味深い。また、N 村ともども、青壮年世代の一部には 500km 近い遠方からの移住者が存在することも共通の傾向である。

S 村の発展段階は、N 村と対比すると現在発展期後期にあたる。N 村の発展過程をモデルとするならば数年以内に成熟期に移行するものと予想する。

(4) サコンナコン県 NC 村

サコンナコン県 NC 村が行政村になったのは 1970 年である。公式データによれば 2008 年当時 203 世帯 1058 人の人口であるが、2009 年の調査時に現住していたのは 173 世帯である。

NC 村で得た調査データによれば、男性において、熟年老年世代と青壮年世代の出身地の分布にほとんど差がないことが、N 村、S 村と異なっている。女性の出身地については、第一世代である熟年老年世代で近隣からの割合が低く遠方からの移住者が約 4 割を占めるものの、遠方出身者の割合は、N 村、S 村と比較して少ない。

青壮年世代の約 3 割が自村あるいは近隣の出身であることは、N 村、S 村と同様であると考えてよい。

NC 村は、N 村同様に現在は成熟期にあつて、世帯数増加は頭打ちである。

(5) サコンナコン県 K 村

2010 年度末近くに現地調査を行ったため、現在調査データを整理中であり、他の 3 村との比較分析は継続的に進めているところである。

(6) 開拓村の発展段階

3 村の調査結果から再構成した世帯数の変化を、出身地を考慮して分析した結果からは、共通して 4 期の発展段階を考察できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

① NAGATA Yoshikatsu, Growth stages of newly established villages in Northeast Thailand: A case study on villagers' origins in the upper-middle watershed of the Songkhram River, JVGC Technical Document, 査読無, No. 5, 2010, 23-28

② 永田好克、開拓農村の発展と人の移動—タ

イ国東北部の事例から—、情報処理学会研究報告、査読無、2009-CH-83、2009、159-174

③ NAGATA Yoshikatsu, Rural migration network in Northeast Thailand: A case study in the upper watershed of the Songkhram River, Rural migration network in Northeast Thailand: A case study in the upper watershed of the Songkhram River, JVGC Technical Document, 査読無, No. 4, 2008, 213-218

[学会発表] (計 4 件)

① NAGATA Yoshikatsu, Growth stages of newly established villages in Northeast Thailand: A case study on villagers' origins in the upper-middle watershed of the Songkhram River, GIS-IDEAS 2010, 2010 年 12 月 9 日, ベトナム・ハノイ市・ハノイ工科大学

② Yoshikatsu Nagata, Spatial Distribution of Original Homes of Migrants to Newly Established Villages: A Case Study in Northeast Thailand, PNC 2009 Annual Conference, 2009 年 10 月 6 日, 台湾・台北市・中央研究院

③ 永田好克、開拓農村の発展と人の移動—タイ国東北部の事例から—、シンポジウム「Historical GIS の地平」、2009 年 7 月 26 日、帝塚山大学(奈良県)

④ NAGATA Yoshikatsu, Rural migration network in Northeast Thailand: A case study in the upper watershed of the Songkhram River, Rural migration network in Northeast Thailand: A case study in the upper watershed of the Songkhram River, GIS-IDEAS 2008, 2008 年 12 月 5 日, ベトナム・ハノイ市・ハノイ工科大学

[図書] (計 1 件)

① 永田好克、東北タイのソクラン川流域にみる現代開拓農村の形成過程、HGIS 研究協議会編、勉誠出版、歴史 GIS の地平 - 景観・環境・地域構造の復原に向けて -、2011 年 7 月刊行予定、11 ページ(ページ範囲未定)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

永田 好克 (NAGATA YOSHIKATSU)
大阪市立大学・大学院創造都市研究科・准教授

研究者番号 : 70208023

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし